



雨
久
花

目次

-Imanu'el-	
↑君が去った世界↑	3
雨久花	
Before Crisis ↑水底に潜む花↑	7
AfterDomination ↑-逸水-↑	8
--	10
↑↑	13
--	15
UnderflowErasure -有り得なかった夢-	16
	18
CommonGehenna -常夜のカラス-	24
	30
The AlastorVampire -翼の悪魔-	32
	36
謝辞	40
Last But NotLeast. -迷探偵猫羽のよろず事件簿-	41

-Imanu'el-

† 君が去った世界 †

何事も、始まりには期待と困難を伴うが、終わりの時はあっさり訪れるものだ。
その共同生活は、長くて一年。早くて数カ月と最初から知っていた翼の悪魔は、自ら
終止符をうつことにためらいはなかった。

——オレのことは……忘れていいからさ？

撫でるような通り雨の中を、ひとまずの避難所に向かって、頼りない足取りで青銀の
髪が悪魔がひたひたと歩く。

応急処置しか施さず、じわりと血が滲む胸元を拙く掴み続ける。自分で招いた結果と
はいえ、こぼれる呻きが我慢できない。そうでもしなければ、今ここで、悪魔の体全て
が崩れてしまいそうだった。

「いた……い……………」

こんな窮地は、何度も通ってきた。元々死体を無理やり動かす悪魔で、存在の依り所
自体、己の体ではなく翼に憑いていた。

だから相方の内に潜む黒い「神」に、挨拶代わりにつけられた傷など、何ということ
はない。それなのに軋む心臓の痛みが、翼の悪魔には一番わけがわからなかった。

「いたい、よ、これ……ツバメ……………」

相方を救えないことはわかっていた。それなら無理に手を出すことはなかった。それ
は最早時間の問題で、わざわざ誘いをかけなくて良かった。

出会った時から相方は「神」に隠されていた。あえて「神」の使徒の役目を放棄し、地
上の蜜を啜っていただけだ。

悪魔も相方も、神に纏わる「翼」を持っている。本来天上の鳥と呼ばれる使徒——死
神だった悪魔は、己の翼の意味を、それを奪った相方に出会って初めて知った。

「命くらい、さ……いくらでも、分けてやる、けどさ……」

この世界には、ヒトは皆、翼を失い天から落ちてきたものだという寓話がある。汚れた命が再び翼を得て天に戻るため、地上での長い試練があるのだという。

それなら元々翼を持つものは、運命を変え、いつでも天に戻っても良い。天上に坐す神に仕え、救われている使徒なのだ。

「オレは……神様の、救いなんて……いらぬ、から……」

悪魔が現在向かう場所を思えば、それは自身への壮絶な皮肉だ。けれどそれしか、悪魔にはもうできないことがない。

あまりに胸が痛み過ぎて、他には何も思いつかない。血の気が足らない脳は回らず、引きずる歩みもほとんど最後の本能だった。

「いたい、よ……ツバメ……」

間違えたのは何処からだったのだろう。そもそも何を悪魔は間違えたのだろう。

この痛みの理由がわからないこと。聖と魔の翼を併せ持つ悪魔には、それだけが神に問いたい苦悶だった。

やがては止まる神の慈悲に濡れる、黒い翼のカラスが囓^{わら}う。

青銀の鳥は翼を納める。悪戯^{いたづら}な雨が籠からあふれ、鳥の世界を押し流す前に……。

-Imanu'el- Lost Hexagram.

write:2018.6.5

雨久花

Before Crisis † 水底に潜む花 †

「雨久花」を、「うきゅうか」でなく「みずあおい」と読むのだと教えられた時、日本語を真面目に学んでいた山科ツバメは、久しぶりに匙を投げたくなった。

それどころか、「みずあおい」は普通に「水葵」とも書き、あまつさえそれを「なぎ」とも読むらしい。最早違う世界の話でしかないと、辞書と会話を投げ出した異世界人の彼に、雨久花と同じ蒼の目を持つ同居人は、端正な顔でころころと笑ったものだった。「ナギが来た時、それ言うなよ。その命名気に入ってんだから、あいつ」

わざわざいつ来るんだ、と彼はつっこみたくなった。彼と同居人が元いた世界と、更に相対する悪魔の世界にいる相手が、何故この平和な日本に来るのか意味がわからない。

同居人を元に造られたらしいその悪魔の姿は、同居人と全く同じ形をしている。違うのはナギの方は完全に女性型という点だが、同居人がそもそも女に見える美形で華奢な青年なので、彼にはやはりよくわからない。

思えばその頃、同居人は既に、彼の異変に気付いていたのかもしれない。「雨」の象意を持つ化生の彼を、補佐できる力の持ち主が「雨久花」——水葵^{みずあおい}という悪魔^{なぎ}なのだ。

その悪魔を、同居人が呼び立てすること。それは彼に命を分けて生かしている同居人が、一人では彼を支え切れなくなったことを意味し……。

「オレのことは……忘れていいからさ？ ツバメ」

それがおそらく、これまでの同居人の最期の笑顔になったことを、眠れる今の彼は知る由もない。

*

After Domination † - 逸水 - †

やましな山科ツバメという、吸血鬼の翼を持つ雨男の彼について、高位の悪魔である橘水葵はいつも低く評価していた。

今も朝の狭い部屋でうつ伏せに横たわる彼の金髪を、隣に正座してべしべしと軽く叩く。起きませんね、などとうそぶき、同居人の苦笑を買っている始末だ。「目は開けなくても、声は届いてるから、注意しなよ。ツバメって、そういう奴だから」

同居人の途切れがちでかすれた声に、消え行きそうな疲労が混じっている。

そもそもどうして現在、彼の目も開かないのだろう。同居人と同じ青銀の髪と鋭い蒼の目で、長い髪をまっすぐ腰まで垂らす水葵が、この世界で言えば漢服のような出で立ちのまま、ここ日本に来ていることはわかるのだが.....。

「聞いていません。山科燕雨がそんな危険人物であると言われるのは、私には心外です」

人外生物としての強度は、水葵の方がツバメよりも遥かに上だ。虫が危険と言われても象にはびんとこないだろう。

水葵にとっては主君の位置付けである氷輪汐音も、悪魔としては水葵より低位だ。水葵もツバメと同じで、同居人の汐音の従者であるはずなのに、汐音に対する水葵の声色は辛辣だった。

「どうしてこんな弱い魔剣に、貴方ほどのヒトが重傷を負わされるのですか、我が君」

うーん、と。両手をついて座り込み、動くこともできないとわかる汐音の姿が、倒れている彼の視覚でなく、水葵の目から伝わってくる。

そんな風に、周囲にあるものと勝手に感覚を共有してしまうのが、ツバメの生まれ持った「直観」だ。胸の中央からじわじわと血を流している汐音の痛みも、当然先刻から伝わっている。

その殺傷を汐音を受けた時、ツバメの意識も落ちたとわかった。汐音に命を分けられる従者であるツバメは、源の命が危機に瀕せば、下流の方が枯渇の早いのは道理だろう。

しかしその傷を彼がつけたと、水葵は聞き捨てならないことを口にはしている。汐音は今にも死にそうなほど辛いくせに、あははと軽い笑顔を浮かべた。

「まいったね。隙を見せて誘い出そうとしてみたら、思ったより大物だった感じ」

「誘い出す？ 貴方が処刑すべき悪魔が、山科燕雨の内にいたと言うのですか」

汐音は悪魔を殺す悪魔という、ややこしい立ち位置の死神だ。汐音も水葵も一見はヒトに見えるように、多くの悪魔は悪魔らしい顔をしていない。だから見つけるには罫も必要だと、過去に汐音が言っていたことがある。

ところが汐音はまるで無責任な様子で、火遊びに失敗した子供の如く、残念そうにふうと息をついた。

「悪魔じゃないのは知ってたけど.....オレまで神隠しによばれるなんて、さすがに思わないじゃん？」

「.....？」

「まさに、バチが当たったかな。触らぬ神にたたりなし、ってやつ」

水葵も険しい顔で首を傾げているが、彼にも何が何だか、さっぱりわかってこない。

汐音が嘘をついていないのはわかる。それなのに、何かが致命的に、ツバメの現状把握を阻害しつつあった。

ツバメは元々、直観という「壊れた五感」を持っている。その後押しがなければ、そんなに洞察力のある方ではない。

他者の感覚——たとえば人の痛みを共に感じ、それから感情が生まれる過程を共有するのがツバメの直観だが、そこから発展する複雑な思考までは追跡できない。似たような直観を持つ妹は逆で、感覚刺激で生まれた感情が、外界に発されていく方の過程を主に感じ取るため、ツバメよりも洞察力が鋭いが、共感の深度としては浅い。

だから今、先を続けられずに沈黙した汐音の中で、整理できずに溢れる胸のざわめきを、ツバメはもっと感じ取れるはずなのだ。あまつさえ、ツバメと汐音は命を共有しており、誰より近い共感者となり得るはずだ。

それなのに、何もわからない。物理的に傷付けられた痛み以上に、何かが汐音の胸を締め付け、汐音自身が感情の自覚を拒んでいる。

そして汐音から分けられる命も、当然ながら拙くなっていく。それと同時に、ツバメの中で、汐音という存在そのものが薄まっていくようにも感じられた。

— —

この状況がわからない苛立ちは、せっかちな水葵が一番強かったらしい。汐音が「いだーっ！」と叫ぶほどきつい止血をしながら、乏しい情報の中で水葵なりの的確な状況整理を切り出していた。

「つまり貴方は、何故か山科燕雨の内にいる使徒の『神』に遊び半分でちょっかいを出した。そして返り討ちにあい、神隠し——『神』に命を奪われかけたところ、山科燕雨への『力』の供給を減じて動きを止め、相討ちに持ち込んだと、そんなところですね」

……遊び半分じゃ、ないもん、と。子供のような涙目で返しつつも、水葵の見立てに汐音も大体異論はないようだった。

燕雨の中に何がいたのか、燕雨自身はさっぱりわからないが、汐音はそれをどうにかしたかったらしい。いつからそんなものがいたのかわからないが、何故今、このタイミングで汐音はそれをしようと思ったのだろう。

わけもわからず、倒れ伏すままの燕雨が全く解せないように、水葵も怪訝さを露わにしている。

「何故山科燕雨の内に、貴方を害せるほどの『神』が宿るのですか。人工の精霊亜種にそこまでの神性があるなど、普通では到底考えられません」

相変わらず厳しい言ではあるが、燕雨自身が人外生物としては無力な部類に属することは、この場の誰もがわかっていた。問題は一つ、燕雨が異常なほどの憑依体質であることだろう。それによって燕雨は汐音だけでなく、沢山の人外生物や、もしくは人間霊の力を借りて、燕雨だけではできないことを可能にする特技があった。

それでも「神」という至高の存在の一端を降ろすとなると、低次に在るものの憑依とは勝手が違う。普通の^{よりわら}依童は、悪魔や天使といった次点の高次生物を、身の程に合ったレベルで憑けるのが精一杯なのだ。

「先天的に、余程の神性を持ったものでなければ、神降ろしの器とはなり得ません。何かの『神』自らが、器の限界による神威の制限を覚悟した上で、わざわざ有限の器を選ばなければ」

そんな事態はそうそうないと、高位の悪魔たる水葵はよく知っているようだった。人間の罪を請け負った救世主でもない限り、どの神が好き好んで、弱い生き物の体を使うかということでもあるのだ。

「山科燕雨を選んだ『神』の使徒が仮にいて、そんなものがこの弱小な器に憑けば、山科燕雨の意識など即消えるでしょう。それが『神隠し』です、我が君」
「ナギの言う通りだと思うけどさ。そもそもツバメは、神隠しで消えなかったから、オレの『鍵』になったんだけど？」

応急処置はされたものの、やはり座り込んだまま動けない汐音は、顔だけを不可解そうにして水葵を見つめている。

「ツバメが神隠しにあった時、オレとの命の繋がりがその前に既にあった。それを辿って、ツバメはオレの所にやってきて……ツバメとしてオレの命を受け取って、『鍵』になったの？」

汐音が珍しく、いたって真面目な目付きなせいも、水葵は無表情になって黙り込む。

汐音の中には、水葵の言に対する納得と、それに反する現状への疑問が渦巻いている。水葵の中には、どちらかという戸惑いの感情が強くと、燕雨の直観には伝わってきた。

「山科燕雨が……神隠し？」

水葵の当惑は、燕雨にもよくわかった。何故ならそれは燕雨自身も、おそらく水葵も、思ってもみなかったことで――

「そんなものに、いつ、あったのですか？ ……山科燕雨は」

「……え？」

「燕雨」も水葵と、まるで同じことを思った。

神隠しとは何だろうか。そんなことが、己の身にはあっただろうかと。

「それに、山科燕雨が貴方の『鍵』とは、どういうことですか。山科燕雨は、貴方――数多の翼の悪魔、氷輪翼よくるの翼の強奪者に過ぎないでしょう。貴方が寛大だから翼の力を使えるだけであって、それ以上でもそれ以下でもないのでは？」

ここで不意に、燕雨もひどく、混乱してしまった。

汐音から分けられていたのは、「力」であり「命」だ。けれどそれは、翼だけの話だっただろうか。そんなに普段、燕雨は汐音の翼を使っていたらどうか。

燕雨の身の内には確かに、過去に奪った翼が納められている。それでもこれまで、燕雨に力を与えていたのは、何か他のもののような気がしてならず……。

汐音は水葵の反応に、一瞬、虚を突かれたような顔をしていた。

しかし、悪魔もヒトも裁く鋭い蒼眸を持つ死神は、ある決定的なおかしさを見逃さなかった。

「オレのこと……『翼槍』って、呼んだ？ ……ナギ」

「？」

「お前さ、今日は、何処からここに来た？ やっぱり、橘診療所？」

「それはやむなくです。私自身には敵地とはいえ、わざわざ別ルートを造る、異次元移動の手間をかけなくても良いでしょう」

「そっか……そーいう、ことか……」

燕雨とはまた違った、現状に対する勘の良さを汐音は持っている。汐音の言葉に対する、水葵の純粋な惑いの様子だけで、何かの異状の根幹を掴んだようだった。

「多分、そこで、混線してる……だからアイツは、オレを殺し切れずに……燕雨からも、手を引くしかなかった、のか……」

ぎり、と。汐音が穴をあけそうなほど、床についた手に力を入れた痛みが、燕雨にふっと伝わってきた。

† †

「橋診療所」とは、ツバメの故郷とこの世界だけでなく、数多の異次元を繋ぐ中継地点だ。橋ナギはその院長の伴侶であり、そこを通ることに、何のためらいも必要ないはずなのだ。

そして、氷輪翼榎に対して院長が新たにつけた「汐音」の名前を、「ナギ」が知らないはずもなかった。

そうしたいくつかの違和感だけで、何かの運命のねじれを察したらしい汐音の、声にならない悲鳴を「ツバメ」はきいた気がした。

まいったね、と。汐音が不意に、狭いアパートの中央から、入り口の方に振り返り、困ったような微笑みを浮かべる。

『^{シングル}時雨』って名前……伊達じゃないなあ、ホント……』

「？」

その汐音の発言にも、大きく首を傾げる水葵に、更に汐音は納得がいったように顔を伏せる。

汐音の目に一瞬映っていたのは、入り口前のキッチンに逆さまに吊るされた、^{たにうつき}谷空木という植物のドライフラワーだった。以前に汐音が気に入って吊るした花だ。

それをこの状況でちらりと見たのは偶然なのだろうが、眠るツバメには何故か最大に引かかる一時だった。

どうしてそれが引かかるのかもわからず、遠くなってきた燕雨の意識から急速に何かが零れ落ちていく。

意識を保つ力すら消えていくのが、何故なのかわからない。汐音が完全に、燕雨に渡す「力」を遮断したとしか思えないが、そのせいで、それからの二人の会話は途切れ途切れにしか聞こえなかった。

「つまりさ。燕雨がツバメな世界に、『時雨』はいるんだよ」

「燕雨は神隠しにあってない。でも、ツバメはあってるんだ」

『時雨』はツバメしか動かせないから、もうここにはきつといないよ」

水葵は要領を得ないようではあるが、ずっと真剣に聞いている。

燕雨が山科家に養子に行く前の名前、「シグレ」をどうして汐音が連呼するのか、それも燕雨にはわからなくなってしまった。

きつとそれは、橘「水葵」が現れた時点で、定まってしまった「ツバメ」の末路だった。

「^{時空}世界」とは、それを観る者次第で変容すると、侵蝕する闇の中で誰かが嗤った。

このままツバメは、水底に消えゆく^{みずあおい}雨久花のように、己が意識を沈ませていくのだろう。

— —

橘水葵が、橘と名乗っている理由を、「燕雨」は思い出した。

水葵は元々、数多の翼を持つ悪魔が大きな治療を受けた代価として、橘診療所に嫌々貸し出されていた。そこで働くよりも燕雨に手を貸す約束で、燕雨の母と水葵が協定を交わしたのだ。水葵と釣り合いがとれる人外生物が燕雨の母だからだ。

だから今回も燕雨の力となるために、水葵はここにやってきたわけで——

しかしそれも、その悪魔には意外な展開であるようだった。

「まあ、助かったよ。ナギが最初から、燕雨を助けてくれるつもりで」

彼女には他に大事な役目があるのに、どう説得しようかと思っていたと悪魔は言う。様々な記憶の何もかもが交差し、混沌の渦に飲み込まれていくのを、最早燕雨はどうすることもできなかった。

「悪いけど、オレだと燕雨の力にはなれない。『燕雨』は吸血鬼じゃないし、それに——……」

どうしてなのか、燕雨にはもう、その悪魔の名前も思い出せなかった。

「ここにはきっと……『時雨』も『オレ』も、いないはずだから」

泣いていそうな声だ、と彼は思った。

辛いのはその罅割れだらけの心に、悪魔自身が気付いていないこと……それを教えてやれることはないまま、彼の意識は完全に闇に落ちたのだった。

*

UnderflowErasure　－有り得なかった夢－

朝が苦手であることと、朝に起きれないこととは違う。

どちらかと言えば夜型である山科燕雨は、折目正しい山科家に養子に行く前、^{うつき} 檜紫雨である頃からそう思っていた。起きる必要がないなら寝ていればいいが、必要があるなら体調など関係なしに起きる。

何をするにもそれは同じだった。どんな状態であれ、動くべき時であるなら、体が動く限りは動く。

だから山科家に行った後に、体調が悪い日はちゃんと休めと怒られた時は、大きく首を傾げたものだった。

――父上の悪い真似をしちゃ駄目！　父上とアナタじゃ、そもそも頑丈さが違うんだから！

山科家は元々、檜紫雨に剣を教えてくれた師の一家だ。人外生物としては軟弱な紫雨を、仕事で留守がちの両親よりも根気よく鍛えてくれた。武士は食わねど高楊枝、という師の姿勢は紫雨もすぐに馴染めるもので、師弟関係は良かったと言っていい。

紫雨が自身を鍛えていた目的、大昔に攫われた妹と再会し、助け出すことができからは、師と同じ仕事に就く前提で養子に迎えられた。実際には、師の大事な一人娘である「^{つぐみ} 鶯」と仲睦まじい紫雨を師が警戒し、婿でなく養子だと言い張っての縁組らしいが.....。

――これからは本当に、一緒に生きていくの。.....アナタはうちに、帰ってくる義務があるんだからね。

いつも凜とした才女の鶯が、紫雨の養子入りが決まった際に、頬から耳まで赤く染めて、両目を潤ませて紫雨と手を握り合ったこと。その時の温かさを、今も紫雨――山科燕雨は、忘れられない。

妹を助けた少し後から、実際には三年、紫雨は行方不明になっていた。家族にも鵜にも死んだものと思われており、紫雨自身、死を覚悟した三年間だった。

そもそも本当に、紫雨は軟弱だったのだ。妹だって救出の一番の功労者は父で、瀕死の紫雨を救ったのは、妹の居場所に関わっていた翼の悪魔だ。その借りを返すために、紫雨は強くならなければいけなかった。その悪魔がくれた「力」の翼を、使いこなせるようになるために修行した三年だと言える。

今から思えば、師も悪魔も、どうして紫雨にそこまでしてくれたのだろう。師と悪魔はそもそも古い仲間らしく、山科家に行けと勧めたのも悪魔だ。

雨の多い日本の季節柄か、ややじめじめとした布団の上で、そろそろ起きなければと思いつつ、燕雨の頭にはそんな記憶が巡っていた。

誰かが燕雨を、静かに起こそうとする声が聴こえる。別に必須事項ではないので、のんびりしている燕雨が、誰かは不満であるらしい。いつもの見送りをしてほしいのだろうと、燕雨も胡乱な夢を振り払おうと試みる。

長い使命だった妹を助けた後となつては、紫雨も特別家に帰る理由はなく、鵜に会いたい一心で悪魔の元を離れた。それから五年以上、山科燕雨として穏やかな時間を過ごし、師の目を盗んで鵜と触れ合ったことも度々ある。

毎日、明日も今日と変わらない朝が来ると、彼は信じていなかった。こうして異世界までやってきたように、いつまた離れても後悔のないように、鵜の温もりは全身で覚えており――

高校に行くだけの同居人が、淡い夢にひたる燕雨を叩き起こし、見送られながらも不機嫌そうに、安アパートを後にしていった。

「燕雨は最近、たるんでいます。私にだけ早起きさせるのは、フェアではないと思いませんか」

「っても……俺、夜も働いてるんだけど」

「私が誰のために、高校になんてわざわざ通ってると思っているんですか。猫羽が心配、それだけのために、こんな遠方に駆り出されている私の身にもなってください」

この日本で妹を見守ってくれている同居人、橘水葵の言う通りなので、燕雨としては頭を下げるしかない。しかし正直なところ、あまり水葵を送り出す姿を見られたくない。

燕雨がよくバイトをさせてもらう駅前商店街では、水葵が燕雨の伴侶だと勘違いされている。高校生相手は犯罪だろうというつつこみと、何て美人な彼女なんだとやっかみを受ける。

「美人って言っても……人形、なんだけどさ」

水葵は燕雨に「力」を分けてくれた悪魔の、姿を模した人形に宿る別の悪魔だ。ドラゴンと言える本来の姿のままでは、妹である猫羽のいる高校に通ってもらえない。当然のことながら、怪物を相手におかしな気分が起ころははずもない。水葵が本気を出した時の迫力は、先程までのような小言の比ではない。

それでも水葵と燕雨の共同生活を、鷓はこっそり不満そうにしていた。そろそろこの妹を見守る潜伏も潮時だろうかと、燕雨は思い始めている。

一度起きてしまうと、睡眠時間が足りていなくても、早い内から仕事を探しに行こうと思うのが燕雨の常だ。じきに故郷に帰るつもりなら、そこまで仕事に拘る必要もないかもしれないが、お金が余れば妹に渡していくこともできるだろう。

そんなことを考えて、開けっ放しだったアパートの鍵をかけようと階段を上り始めたところで、思わぬ声が道の方からかかった。

「よっ。流惟から連絡取れないって文句来たんだけど、ちゃんと元気そーじゃん？」

「ほら。だから来るだけ無駄だって、あれほど言ったのに」

「――あ」

振り返ると、二人の顔見知りの男女が扉の前に立っていた。燕雨にとっては、ややこしい縁戚の二人だ。

へらへらと手を振る金髪の男は、元は橘診療所の祖母の甥で、燕雨の母の流惟には従兄にあたる。生粋の悪魔なので見た目は燕雨と同年代に若く、好む服装はライダー系と日本では言うらしい。

隣で不機嫌そうにするセミロングの黒髪の女は、男の連れ合いだ。幅広の黒い縦襟のツーピースで、黒ずくめと地味な姿を、丈の短いスカートからのぞく生足の華やかさで相殺している。

二人共、昔から変わらない姿で、燕雨を可愛がってくれた。よくこちらの世界に来ているのは知っていたが、こうして出くわしたのは初めてだった。

「何で……^{けい}炯や^{アキ}鴉夜が、わざわざ……」

口にしながら、どうしてか、彼は唐突に涙が出てきそうになった。

異境で思わぬ懐かしい人に出会えた、そんな感傷どころではない。当り前のように、二人が彼に会いに来て、気の置けない間柄として言葉をかわすこと。そんな「今」が、何故かひどく胸苦しかった。

おかしい胸の痛みのせいで、言葉に詰まった燕雨を見上げて笑いかけながら、炯が階段を上り始めた。

「あれ、オマエ最近、ミサキの首輪はつけてないん？ こっちの世界もヘンな奴はしっかりいるから、あんまし油断しない方がいいぜ？」

「あ……うん。そういえば……うん」

元の世界では、燕雨は大体棘つきの黒いチョーカーを身に着けていた。人外生物への視力を上げるそのアイテムは、こちらにも持ってきているが、あまりの平和さにほとんど放ったらかしにしており、毎日着けるのは腕の黒いバンダナと蝶のペンダントくらいだ。

鴉夜も炯に続き、これは二人共、部屋に来る気が満々だと見えた。燕雨は朝の仕事を諦めて、アパートの扉をそのまま開ける。

「借りた部屋の掃除はちゃんとしてるの？ 退去する時に荒れた状態だと、修繕費にもお金がかかるわよ」

「えっ、そうなのか。知らなかった、ありがと」

「借りる時に説明されたでしょ？ そもそも、貴方が部屋を借りられたのがびっくりなんだけど」

鴉夜がいぶかしむように、燕雨は賃貸住宅が借りられるような、この世界での戸籍を

持っていない。手続きも燕雨がしたのではなく、燕雨に翼をくれた悪魔が全てやってくれた。

「……俺は、何も知らなくて」

全てはそう、翼の悪魔が調整してくれたはずだ。この世界に燕雨が住めるようにして、手下である水葵をここに派遣し、燕雨の助力をさせることも。

燕雨一人では何もできない。当然のような顔で過ごしている日常生活は、燕雨以外の誰かが、お膳立てをしたものなのだ。

完全な不意打ち訪問だったので、狭いワンルームを占める敷きっぱなしの二つの布団を見て、炯が笑い、鴉夜が苦い顔をする。

「向こうの御所では貴方もしっかり生活してたでしょ。こっちでこそ、さぼっちゃだめよ」

「うん……ごめん」

「まーまー。布団が一つじゃないだけ、いっていかさ。ていうかこれ、オマエの趣味？」

入り口前の台所で、逆さにつつあるドライフラワーを、炯が面白げに見つめる。最低限の生活用品以外何もない部屋で、その乾いた花だけは、確かに意外な存在感があった。「紫雨も水葵も、こっち方面は全然だろ。生活の彩りとかインテリアとか、ほんとイメーজないもんなあ、オマエら」

炯は燕雨を紫雨と、旧い名前のままで呼ぶ。対して炯は、^{うつぎ} 梔炯と、燕雨が紫雨だった頃の姓を継いで名乗っている。

梔の姓に関わる「怠惰」な悪魔で、遊び心しないと評しても過言でない炯は、花がほとんど落ちてしまった味気ない谷空木を、妙に面白げに観察していた。

「紫雨の発想じゃないよな、多分。女の匂いがするんだけどなー」

「……ちょっと。別にそんなの、そこまでつかかかるとじゃないでしょ」

いつも通り、にこにこしている炯だが、その谷空木に目を留めずにいられない違和感を持ったのは、燕雨にもよく伝わってきた。

見た目は鴉夜の方が鋭そうだが、炯は魔界の昼行燈と異名をとる曲者だ。先刻の言葉通りに、それを作った女が別において、燕雨が連れ込んでいるというニュアンスではなさそうだった。

燕雨は燕雨で、不思議と、どうしてその谷空木がそこにあるのかよくわからなかった。「……キレイだったから、折って帰ってきたんだ。でも……」

^{あめふりばな} 雨降花、または葬式花の異名を持つそれを、そうして逆さまに吊るしたのは燕雨ではない。おそらく水葵でもない、炯と同様の違和感が燕雨の内にも広がっていく。

首を傾げた彼の様子を見て、大人びた顔で笑う炯は、あっさりと話題を変えた。
「それにしても、疑わしきは滅せよ、不安の芽は即キルの殺伐少年だった紫雨が、こんだけ丸くなってオレは何よりだなあ」

「.....」

三人で布団の上に座り、炯がぼむぼむと、燕雨の頭を楽しそうに撫で叩く。
「オマエみたいになまじ弱いバケモンだと、隙あらば抹殺。じゃないと誰にも勝てないもんな。そういう意味では、最初から弱い生き物が共存する仕様の、こっちの世界の方が肌に合ってるじゃねえ？」

妹を助けようと、手段を選ばず必死だった過去。否定できない燕雨はバツの悪い顔をするしかない。そこに更に、鴉夜が追い打ちをかけてきた。

「お願いだから、こっちではそんな短慮は起こさないでね。貴方を討伐するなんてことになれば、色んな方面に恨まれるのはごめんだから」

鴉夜は様々な世界において、その場所での秩序を壊す存在を管理する仕事に就いている。連れ合いの炯ですら管理対象で、なかなか気楽には生きられないのだ。

そんな鴉夜に、気苦労をかけるつもりはない。人間のようにこうして暮らしているのも、余計な揉め事を起こさないためだ。

しかしそれは、燕雨の発案だっただろうか。そんなことを思いつけるほど、燕雨は丸くなっていただろうか。

炯と鴉夜の顔を見た瞬間から、胸を締め付けていた妙なモヤモヤは、時間がたつごとに強くなる一方だった。

気を抜けば、今にも泣いてしまいそうだ。ちょうど近所から猫の鳴き声が聞こえてきたので、わけのわからない高ぶりを抑えようと、燕雨は自ら話を逸らした。

「なあ。この近くでたまに、多分人間に殺された猫の死体が見つかるんだけど.....ああいうのは、鴉夜は討伐しないのか？」

きょとん。と、炯と鴉夜が目丸くする。燕雨は普段、あまり自分から喋らないのだ。わざわざ口にして尋ねたほどの内容は、自分で思った以上に気になっている事柄なのだと、二人の反応を見てから自覚する燕雨だった。

燕雨は特別、猫好きなわけではない。それでも無性に、その事態に対しては、何もできないことが歯がゆかった。

鴉夜は難しそうに考え込んで、燕雨のそうした嫌悪感を汲んでのことか、珍しく申し訳なさそうに返答してきた。

「あたしもそういうのは、気分が悪いけど.....人間の世界で人間がすることには、手は出せないの、ごめんなさい」

「.....」

「鴉夜はあくまで、人外担当の使徒だからなあ。まあ、そーいう人間の醜さも、悪魔っ
ちや悪魔って言えるんだけどな」

わしゃわしゃと、今度は鴉夜の頭を撫でた炯に、何よ、と鴉夜が赤面する。炯が思わず
そうするほどに、鴉夜まで少し落ち込む話だったらしく、燕雨は反省する。

しかし、炯がその後続けた言葉に、燕雨の中で何かの歯車がかちりと音をたてた。
「その手の悪魔は、人間にフツーに備わったもんでさ。具現し出すときりがなくて、しか
も結構、倒すのも大変だし、悪魔成分を失った人間もふぬけるしで、誰にもあんまりい
いことないんだよな」

生粋の悪魔である炯が口にした、人間という生き物の内に在る悪魔。それは何処かで、
彼も耳にしたことのはずだった。

――平和な目的のために、ただ平和に生きる。オレにはなかなか、できなかったよ

その時の苦勞を「彼」は覚えている。人間などの悪魔を狩っても、それは非効率なの
だと、さる悪魔の処刑人もわかっていた。

――猫羽ちゃんも高校慣れてきてるし、もうオレが見てなくても大丈夫だと思う。

そもそも彼が、猫の虐待者なんて人間のことが気になったのも、その処刑人がつい最
近の夜、とても嫌そうに野良猫の死体を山地に吊っていたからだ。

珍しく強い嫌悪の感情を見せていた相手に、邪魔者の排除をあまり迷ったことのない
彼は、そんなに腹立たしいなら狩りにいけばいい、と軽く言った。するといつにない痛
ましい雰囲気、相手は呟いていた。

「嫌いだけどね、自分の軋みを別に向ける奴はね。そういう奴は、この世の法で裁かれて、
この世を変えていくべきなんだよ」

それはおそらく、鴉夜が言うことと同じだ。人間でない彼らは、人間の世界に大きく
干渉してはいけないのだ。彼らが無理に人間の内の悪魔を狩れば、悪魔を奪われた人間
が痛く弱るのも何故かわかっていた。大抵の人間の内には、必要だからこそ、悪魔が存
在しているのだ。

無力だ、と彼は思った。目前で耐えている相手の辛さを、今すぐ解決してはいけな
いらしい。それは彼には酷く居心地の悪いことだった。

周りに良い手向けの花が生えていなかったの、一度帰って、家にある花を持って来てやろう。そう言って彼らが安アパートに向かっていたら、急な雨が降り出してきた。

それからのことを、彼は覚えていない。けれど、あのドライフラワーを作ったのは、間違いなくその相手だろう。

何かがおかしく、ずれてしまった日常。

その後の炯と鴉夜の話聞き流しながら、燕雨はもう一度、ぽつりと残る乾いた葬式花を見上げた。

CommonGehenna　－常夜のカラス－

痛みを自身から手放さず、耐え続けているヒト。そんな相手の傍に、何もせずに在ることが、彼は昔から苦手だった。

自分では埋められない穴を、どんなヒトも、生きていく内に何処かで抱える。その穴がもたらす誰かの痛みを、彼の五感是我が事のように感じてしまう。

彼の家族からして穴だらけだった。彼が手段を選んでいたら、現在の平穏は存在していない。翼の悪魔に助けられなければ、とっくに死んでいたという形で、彼は己の存在のツケを払ってきたと言える。

彼の平和な生活ぶりにひとしきり満足して、部屋から帰っていった炯は、悪魔らしからぬ情けを残していった。

「オマエみたいに、戦うしかなかった生まれの奴は、この世界ですら沢山いるんよ。だからオマエも、そろそろ過去から解放されて生きていいんだぜ？」

生まれに縛られ続け、人外生物の管理なんてしている鴉夜を横に、炯がそれを言うかと彼は思った。炯だって悪魔という出自に縛られ、自由な行動を制限されている。それでもその生活は、二人には幸せだろうということも、何となくわかった。

その理由をはっきりとは言えない。それなのに二人に会って、とても安堵している彼がいる。同時に何かは酷く痛くて、これはおかしいと感じる自分を、今日は誤魔化すことができない。

のそのそと、布団を畳みながら、燕雨はまた谷空木に振り返る。

これまではその違和感を、観ないでいられた気がする。だから燕雨がここにいる、二人に会うことができた。なのに炯がわざわざ、谷空木の存在に彼の意識を向けた。

それで言えば、炯と鴉夜が連れ立って会いに来たことすら、彼には何かの示し合わせのように感じられた。

現状に何か、不安や不満があるわけではない。逆に、恵まれ過ぎていることこそが不可解なのだ。どうしてこんなに穏やかな生活を、彼のような咎人が送れるのだろうか。

妹を助け出すまでの長い時間に、彼は多くのヒトの命を奪った。乱世であったし、彼も多くの大切なものを奪われた。ヒトは奪い合うものという生き方が、彼の魂には刻み込まれている。こんな暮らしが長く続くはずはないと、他でもない自らが訴えてくるのだ。

「鵜のそばにいた時は……そんな感じなかったのに……」

ずっと年を取らず、変わらない炯と鴉夜を目にして、どうしても思うことがある。燕雨の成長も同じように止まっているが、ほぼ人間である鵜は、この先年を取っていく。そして何もなければ、燕雨より早く死んでしまう。

瀕死の綱渡りだった以前には、自分がそこまで生きると思っていなかった。けれども、今の安定した状態が続くなら、それは避けて通れない問題になる。鵜だけでなく、鵜の周囲にいる友人達も、人間の血だけを持つ妹にも言えることだった。燕雨が大切に思っている者は、ほとんどが皆、いつかは燕雨を置いて必ずいなくなる。

平和だからこそ、余計なことを考えてしまう。水葵や炯、鴉夜は燕雨より長生きするだろうし、両親も頑丈に思える。いなくなる者ばかりではない。

それでも、鵜も友人達も、妹の猫羽もいなくなった世界では、燕雨は何をして生きるのだろう。そのことを不意に、真剣に考えてしまったせいで――

きっとその欠落こそが、この「今」を彼に問う大元だった。

汐音以外に、誰がいるというのだろう。彼の傍らに、ずっと在ってくれるだろう存在は。

ぽつんと、自分しかいない部屋で立ち竦みながら、呆然としたように燕雨は呟いていた。

「汐音って……誰だっけ？」

そんな名前は、燕雨は聞いたことがない。傍らに在る者、どうして今そう思ったのか、それも全然わけがわからない。

それでもあまりに気になってしまい、普段は直接話さない者にまで、燕雨は疑念を問いかけてしまった。

「刃^{レン}は知ってる？ 汐音って、誰だっけ？」

首か腕にいつもかける蝶のペンダントには、燕雨に以前から付き従ってきている「刃の妖精」が宿っている。燕雨の異世界の言葉を日本でも通じるよう、人間相手に翻訳してくれていて、内助の功も甚だしい妖精なのだが、日頃は直観で大まかに以心伝心ができているため、あえて話しかけないのだ。

刃の妖精は、声に出すほど強い答を求めている燕雨に、少し驚きながらはっきりした意思で応えてくれた。

――オレには心当たりがないっす。師匠がオレを連れてる時に、会ったヒトの中にはいないはずっす。

予想通りの答に息をつきながら、燕雨は仕事を探しに出るため、いつもはあまり着ない黒い上着を羽織る。

「刃は、今……この状態で、幸せか？」

妖精はずっと、燕雨を支えるだけの時間を過ごしている。燕雨が封印し続けている本来の武器、古い宝剣の切れ味を上げる「力」を持つ妖精は、それも予想通りの返答をけろりとしてきた。

——そーっすね、師匠がもうちょっと、剣を使って戦闘をしてくれるとベターっすねえ。この世界は平和過ぎて、オレにはつまないっす。

燕雨の生死も危うかった時代を知っている妖精は、燕雨にほとんど無理を言わない。刃の妖精と生まれたからには、立派な剣に宿れているだけで本望らしい。

そろそろ剣の腕も鈍っていそうだと燕雨は苦笑しながら、炯に言われたチョーカーを壁掛けから久しぶりに手に取る。

現状の違和感をもう少し糾明するには、結局これを使うしかない。砂漠の雨のような諦観と決意が、奇妙な配合で混じり合っていた。

「今までは、多分……視たくなかったんだろうな……」

そんな不要物は片付けていると、燕雨からチョーカーを外させたのは水葵だった。帰ってきて見つかったら怒るかもしれないので、仕事に出る前に身に着け、確認してみるしかない。

「でも——気が付いたからには、仕方ないんだ」

「ソレ」はおそらく、ずっと気になる谷空木がぶら下がる、この部屋でしか視ることができない。

最早本能的な直観が、燕雨にその真実を教えていた。それすら「ソレ」にささやかれた神託だったと、この後すぐに、燕雨は悟るところとなる。

ぼろりと口から零れて落ちた、「汐音」という誰かの名前。

他は全て日常の渦の中へ沈められて、接点は最早、谷空木しかない。

周囲にあるものと、勝手に感覚を共有してしまう燕雨の「直観」を後押しし、人外生物、特に「心」への視力を特に上げる黒いチョーカー。自らの空白と向き合う覚悟を決めた燕雨が、それを丁寧に首に巻いたところで…… ——

そこに浮かび上がったのは、この世界には存在しないはずのもの。

唐突に真っ黒に染まった部屋で、セピア色の谷空木だけが闇の中に垂れ下がり、その花の真下で、闇に熔ける大きな翼を持つ誰かが、燕雨を待っていたのだった。

久しぶり——と。そう言うのがこの場合、適切なかどうか、今の燕雨にはわからなかった。

「オマエは……『時雨』？」

暗闇の中で、きらりと一瞬、ソレの金色の目が光る。

燕雨の旧名、紫雨の由来である紫の目で観えるのは、チョーカーをつけてもそれが限界だった。

くすりと、ソレが小さく笑ったことで、暗い空気に澱みが生まれた。

ソレの目に映る燕雨は、銀色の髪に青い目をしている。燕雨の目に映るソレはまだ暗闇の内に居る。その燕雨の視界がソレにわかっているのも、互いに同じ「直観」でわかる。

ソレは昔、燕雨の存在を不秩序として狩ろうとした使徒なのだ。楡^{うつき}紫雨は燕雨でなく本当はソレになるはずで、だからソレが自らと同じ直観を持ち、そして違う「時雨」であると覚えていた。

「時雨」は燕雨の様子を窺いながら、徐々に闇から抜け出し始める。

どうやら本気で、話をする気があるらしいと、ソレにも伝わったのだろう。燕雨に応えるように、嘲る声色で時雨が口を開いた。

「……意外、だな。オレのこと、知ってくれてるんだな、アンタは」

「……？」

「この最新の世界線では、オレは欠片も存在していないんだよ。オレがアンタと会ったのは、時空が安定化する前の、どちらも存在する世界でだから」

よくわからないが、それで時雨は闇中から出きらないようだった。チョーカーをつけた燕雨が、本来視れるはずのないものを、無理に視ているというのが正しいのかもしれない。

「時雨」とは、紫雨に対してもう一つ付けられながら、結局抹消された名前だ。その名を使う時期が少ないまま、紫雨は山科燕雨になり、忘れ去られてしまった。

時雨は心から楽しそうに、時雨を闇に縛り付ける翼を背に、身動きができない態勢のまままで続けた。

「オレの情報まで、無理に視るのはやめろよ。アンタにオレのことがわかるのは、オレからたった今、必死に汲み上げてるんだよ、アンタは」

「……それが何か、問題があるのか？」

「大ありだから言う。せっかくオレが、アンタのために、都合の悪い運命を変えた世界を造ったのに……アンタがオレを通じて記憶を戻せば、元の世界に戻らないといけなくなるよ？」

一応、真摯に忠告してくる声に、少し燕雨の凝視が緩んでしまった。

どうやら時雨の姿を、はっきり視ようとすればするほど、何かがまた狂ってしまうらしい。それが何であるのかわからないまま、突き進むのは確かに無謀だった。

「俺のために、造った世界って……どうということなんだ？」

「気に入らないか？ アヤもケイも死んでないし、アンタの中にオレ——黒くて悪い翼もない。今のアンタは、水葵にまで力を貸してもらえて、アンタが望む通りの強い化け物になれた、最善に近い世界なのに」

時雨の記憶を、直接共有するのではなく、言葉だけで伝えられれば、そういうことであるらしい。この状態が当たり前だった「燕雨」にはびんと来ないが、ずっと違和感を訴えていた「彼」^{ツバメ}には、やっと腑に落ちる内容の気がした。

「彼」にとっては、それは有り得ず、泣き出してしまいそうな世界だった。それを「記憶」でなく「情報」だけに留めて、燕雨は時雨と対峙を続ける。

「彼」の苦渋と、「時雨」の嘲笑をどちらも感じて、燕雨は慎重に、ゆっくりと言葉を選ぶ。そうしなければ、とても危ういバランスで成り立っているこの場が、何処かの方向に振り切られるのだろう。

時雨の言葉を借りれば、違う世界に変わってしまう。何処の軌道に乗るべきなのかと、おそらくたゆたっているのがこの暗闇なのだ。

どうしてこんなことになったのだろう。わからないのはただ、その一点だけだった。「俺にはこうしたいとか、そんなにないし……比べようにも、違う世界の記憶なんてないけど」

誰かが何か、特別なことを望んだわけではない。平和な世界で、ただ普通の日常を過ごただけなのに、何故時雨は介入を始めたのだろう。

「弄んでいるなら、やめろ。……それしか、思えない」

燕雨のためだと、それが皮肉であることくらい、直観がなくてもさすがにわかる。

燕雨が一番知りたかったことに関して、時雨は何も明かしていない。直観で察しているはずなのに、不誠実な声ばかりが返ってくる。

「アンタはここで、猫羽を見守り終えて、後は鶴と幸せになればいい。これ以上、いったい何の不満があるんだ？」

「.....」

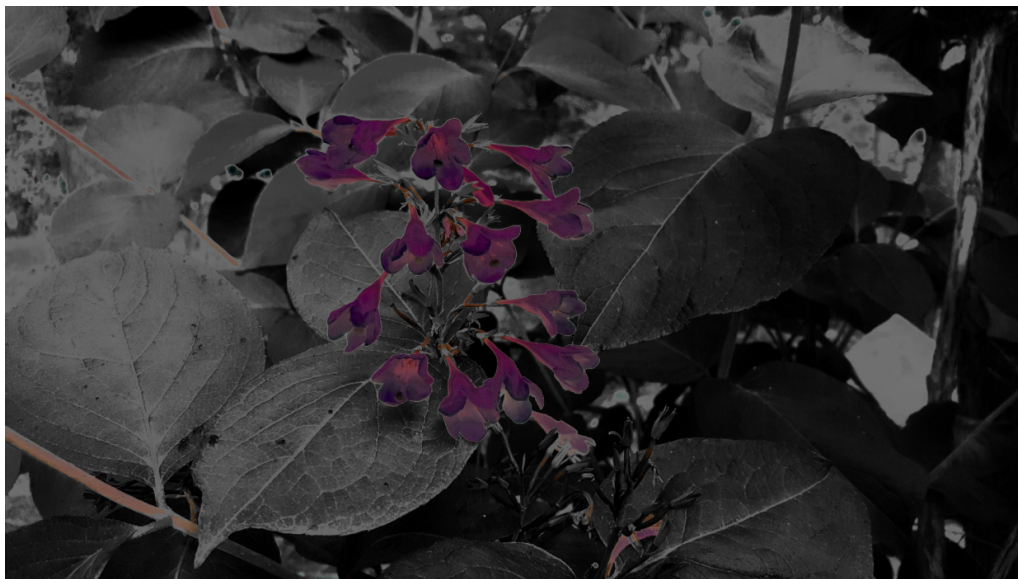
このまま現実に戻り、故郷に帰れと時雨は言う。それでは燕雨が納得できないことをわかっているはずなのに、時雨から次の一言が出るまでに、それからしばらく沈黙の時間が必要だった。

黙って時雨を見続ける燕雨に、ようやく時雨は、真顔になって無機質な声を出した。

「.....汐音もきっと.....そう望むよ？」

燕雨がずっと待っていた、大きな欠落の答。

水気の無かった谷空木に、ここで鮮やかな桃色が戻っていた。



まだ状況がわからない燕雨を、「神」の悪戯たる時雨が呆れたように両腕を組んで見下げる。

「アンタは卑怯だよ。自分の望みのくせに、人に叶えさせようとする。アンタが自分でなく、^{誰か}人の望みを叶えたいと願ってきたように」

「……………」

「鶺鴒も猫羽も、アンタにやるよ。でも汐音だけは、オレがもらうよ」

この期に及んでも、いったい何の欠落があるのか……汐音が誰なのか、燕雨にははっきり思い出せなかった。

ただそれを、時雨が必要として、燕雨の元から持ち去ろうとしていることだけはわかる。

それだけわかれば、燕雨にとっては、もう言うことは一つしかなかった。

「……………」

それでいいのか、確証はない。それでも燕雨にできることは、現在「燕雨」として歩んできた、自分自身の世界――

燕雨であるままで、燕雨ができることをすること。それはどこでも、どんな世界の自分でも、きっと変わらないはずだった。

「……連れていくなら……大事にしろよ」

重々しく、それでもあっさりと、燕雨は言い切った。

時雨は虚をつかれたように、闇に光る金色の目を見開いている。

「……ふうん。いいね、アンタは……今現在、満たされているからこそ、その余裕ぶり」

「……………」

「そんな幸せ、長くは続かないって、誰より知ってるくせに。こともあろうに、まさかオレに――情けをかけてくれるなんてね」

たとえば時雨が、先程の言葉通りに、燕雨の幸せを願うことは有り得なさそうに思えた。

燕雨も時雨の幸せを願うかと言われれば、何とも言えない。ただ、この場で、誰にも大きな痛みを残したくなかった。

それがきっと、欠けてしまった何かの願いなのだろうと。

覚悟を決めて目を閉じると、次に目を開けた時には、何もなかったように一瞬で暗闇が消え去っていた。

同時に、燕雨が向いていた方にも、何もなくなっていた。

「……あれ。何かなかったっけ……あそこ……」

料理なんて一度もしていない台所は、調理用具もなく、当然ながら食器もない。

何も置いていないのは当たり前だ。そう思いながら、大切なものが本当になくなってしまった気がして、燕雨の胸がじわりと痛んだ。

いつの間に時間が過ぎていたのか、ぼけっとしていると、水葵が高校から帰ってきていた。

「……は？ 燕雨、どうして、家にいるのですか？」

「え。……今、何時？」

高校が終わる頃合いという、いつもは燕雨が仕事に行っている時間だ。

起床時間にしても何にしても、さぼりに厳しい水葵の機嫌が、一気に悪くなってしまった。

「まさかあれから、私がずっと苦痛な授業を受けている中、燕雨はぬくぬくと寝ていたとでもいうのですか……？」

立ちっぱなしだったので、ぬくぬくのつもりはないが、眠っていたと言われると否定はできない。水葵に気を取り直してもらおうと思えば、凝りがちな人形の肩もみでもしてやらないといけない。

それでも燕雨には、とりあえず今すぐに、行かなければいけない場所があった。

「……ごめん。ちょっと、元の世界、帰ってくる」

「――は？」

怒りながら唾然としている水葵に、くると背を向けると、黒い上着とチョーカーをつけたまま、燕雨はさっさとアパートを後にした。

目指すは燕雨をこの世界に招いた、橘診療所――数多の世界と時空が不安定に重なる、神と悪魔の交差点だった。

The Alastor Vampire —翼の悪魔—

ちょっと帰ってくる。異世界とは本来、そんなに気軽に行き来できるものではない。
あくまで橘診療所が特殊なのだ。夜診も終わる時間帯に、無理を言って外来に通してもらい、そこから繋がる世界へと、あっさり燕雨は故郷の土を踏んだ。
「すごい久しぶりだけど.....うまくいくかな？」

そのまま帰った目的を果たすために、人間界では出せなかった人外生物の証を、黒い背中に大きく具現させる。

かつて、燕雨の命を救った翼の悪魔から奪った、コウモリのような左の黒い三枚羽。右にはこれも、昔に別の敵から奪った透明の翼を一枚生やし、左右で白玄しろくろの翼を広げる。

これで飛べるかに不安は残ったが、考えても仕方がないので、いびつな翼で地上を飛立つ。

行先は一つだ。この翼をくれて、椋紫雨を山科燕雨にした悪魔に、燕雨は会いに行かなければいけない。

「もうアイツくらいしか、多分いないし」

燕雨が探していた答は、結局見つかっていない。何か欠けたものがあるのは仕方ないが、その負債を引き受けたのが、燕雨だけとは思えなかった。

『『オレ』が欲しがりそうなものなんて.....鶯か猫羽か、アイツ、だろ.....?』

水葵の助けも、悪いことはないのだが、支払う代償が少々面倒くさい。

他に燕雨が影響を及ぼし得るものは、燕雨の命を救った悪魔に他ならない。燕雨への負債がどんな形で表れるのか、確認しにいかずにはいられなかった。

翼の悪魔がずっと引きこもる、この世界での「天国」に、燕雨は何とか拙い飛行で辿り着いた。人間の言う天国とは違い、天に浮いているだけの国だが、この世界で神に纏わる重大な機能のある天空島だ。

妹のために人間界に行くにあたり、水葵の派遣や、悪魔の戸籍で部屋を借りてもらったりなど、翼の悪魔には色々助力をしてもらったが、悪魔自体は普段はここで番人の使徒をしているはずだ。

悪魔が燕雨の命を救ってから、三年の歳月をかけて燕雨を鍛えた場所が、この「天国」でもある。懐かしの場所へ、燕雨が降り立ったことをすぐに感知し、疲れてへたり込んでいた燕雨の元へ、程無くしてその悪魔は現れてきたのだった。

「――久しぶり。まさかとは思ったけど、何で帰ってきたの、オマエ？」

夕暮れの青白い三日月の下で、鋭い硬質の黒髪をかきあげ、当惑するような悪魔が燕雨の前に立っている。

燕雨がこの地まで来たのは、もう五年ぶりくらいになる。本来ここには、翼の悪魔の結界が張り巡らされており、悪魔本人以外は誰も入ることができない。燕雨だけは、悪魔の翼をもらっているのだから、同一者と感知されて例外になるのだ。

「猫羽ちゃんを見守りに、人間界に行ってるんじゃないかなかったっけ？ 何か向こうで、困ったことでも起きたの？」

「……………」

燕雨の前にちょこんとしゃがみ、呑気そうに尋ねる秀麗な青年の姿には、特に異変はありそうにない。

どうしてこの悪魔の無事を、確かめに来るほど急に気になったのか、ここにきて燕雨自身にもわからなくなりつつあった。

以前と変わらない悪魔の様子を見て、とにかく燕雨は、気が抜けてしまった。そうとしか言いようがない。

「……アンタ……汐音って、知ってる？」

「――？ なに、急に何の話？」

頬杖をついて首を傾げる姿に、嘘の気配は微塵も観られない。燕雨が急にやってきた理由を含め、本当にわけがわからないらしい悪魔に、燕雨は最後の、直観の置き土産を口にするしかなかった。

「そいつ……俺の相方……っぼかったんだけど」

座り込みながらも燕雨は顔を上げて、悪魔の灰色の目をまっすぐに見て言う。苦渋を隠せないその様子に、悪魔も真面目に見つめ返す。

凜とした悪魔の目線に、燕雨はその後、自分でも覚えのない言葉を続けることになった。

おそらくそれは、燕雨に消え残った、「彼」の望みで――これで本当に、全てが分かたれてしまう彼らの岐路だった。

「……ごめん、って。力になれなくて、ごめん……助けてくれて、ありがとうって、俺は言わなきゃいけなかったんだ」

燕雨には全く、覚えがないこと。それなのに、涙が出そうになってしまった。

誰の思いか知らないが、誰かが勝手に、燕雨の体を使って言っている。誰に言っているのかすらも、わからないというのに。

悪魔はずっと、不思議そうにしながらも、何も茶々を入れずに、黙って燕雨の声を聴いていた。

そして、燕雨が以前から不思議に思う、何の根拠もない勘の良さで、燕雨にその答を返したのだった。

「.....よくわからないけど。お前のために存在する奴がいて、そいつがもしも、今の言葉を聞いたら.....多分、笑ってると思うよ」

.....? と、理解に困って顔をしかめた燕雨に、悪魔はお決まりのあくどい笑みを浮かべた。

「だってさ、お前みたいな死にたがりが、助けてくれてありがとうなんてさ。ここにいる時もずっと、いっそころして.....みたいに嫌そうだったしね、お前」

「.....」

悪魔は普段、ほとんど人情味を見せない無機質さのくせに、ヒトを茶化す時だけは妙に楽しそうにする。古くには、死んだ人間の子供を悪魔として復活させた存在らしく、背が多少伸びていても、全身からは幼さが抜けない。

人間の頃の記憶はないらしいが、紫雨に手を差し伸べた甘さは、人間としての心なのかもしれない。

「何というか、たまたま凄い翼を押し付けられたから、使いこなせないのは情けない、くらのモチベーションだったよね、お前」

「.....別にそれは、今でもだけど」

悪魔のくれた翼を、使いこなすための三年の修行は、燕雨——当時の検紫雨にとって、想像を絶する辛さだった。死を覚悟していた紫雨は、思いがけず与えられた第二の人生に、大きく戸惑っていたのも本当だ。

「鵜ちゃんの元に帰りたければ、頑張って強くなれと言っても、ツグミには別にオレなんていないし.....とか言ってたっけ」

妹を助けるために、様々な無茶をして生きた紫雨は、間近に寿命が迫っていたと聞いていい。それ故に傍若無人にヒトも殺したし、戦う手段も選ばなかった。

そこから思いもかけない形で、命を繋いだ紫雨にとって、この悪魔は恨むべき相手だ。咎人であっても生きろと、紫雨に己が人生を振り返らせたのだから。

何の権利があって生きろなんて言うのか、とその時紫雨が嘔みついたのは言うまでもない。

せっかく助けた妹や、鶯の存在は、紫雨が悪魔に縋ってまで生きようと思う理由にはならなかった。

だからこの悪魔は、頼んだ覚えもないのに、勝手に紫雨を生かしたに等しい。

その頃の気持ちを思い出したら、溜め息が出てきてしまった。悪魔はそれにもけけら笑いながら、よいしょと腰を下ろして、彼の回復を待つ気になったようだった。

「まあ、そうだろうね。お前には地上の蜜より、天上の救いの方が必要だとは思うよ」

「……」

「鶯ちゃんは、空っぽなお前を埋めてくれるだろうけど。別にお前がいなくても、幸せになれる子だろうし」

鶯には別に、自分がいなくてもいい。そう言った紫雨の心も、悪魔にはその時から、よく理解できていたらしい。

実際そうだろうと、現在も彼は思っている。鶯は心も体も彼より強く、どんな環境でも自ら願いを持てる人間だろう。無理に守らなくても、共に生きる相手が彼でなくてもいいはずなのだ。

「人ってそういう、しなやかなものだよね。だからお前は、お前にしか埋められない相手が欲しかったのかな」

紫雨の望みは、いつの世もそうだ。誰かに自分の穴を埋めてもらうより、誰かの穴を埋めたかった。ほとんどできることもない弱い化け物のくせに、是非を問わず、何かに使える自分でありたいという、どうしようもないエゴイストだ。

妹を助ける使命を終えて、もう何もできない役立たずだと、紫雨は苦痛ばかりだった人生を投げた。その命を拾ったのがこの悪魔だった。

彼がどうしてわざわざ、この天国に戻ってきたのか。

悪魔はその意味を改めて考えたらしく、神妙な顔付きで大きく首を傾げた。

「そういう意味では、オレは多分、お前を使うことはできるけど.....お前はそれを、望んでしまうの？」

何がしかで、彼がとにかく悪魔を心配して来たことは伝わっているらしい。何で急に、と不思議そうにはしているが、彼にとってそれはキッカケに過ぎなかった。

前から薄々、思っていたのだ。この悪魔は甘く、無責任にヒトを助ける死神であるわりに、悪魔を助けようとする者は少ない。

彼の妹は悪魔が関わった一団に最後は囚われていたが、この悪魔がいなければもっと酷い扱いを受けていたかもしれない。悪魔も嫌々関わっていたところを、悪魔の翼を数枚、大きな力の一部を彼が奪い、様々な目論見をぶち壊したわけだった。

だから彼は、この世界ではおそらく初めて.....孤高な悪魔とその血の契約を、自ら申し出る。

「.....アンタさえ良ければ、だけど。俺がアンタの『鍵』になって、アンタの守りたいものを、良ければ一緒に守るけど」

「!？」と端正な目を丸くする悪魔の顔は、とても珍しい驚愕ぶりだった。

ここでの悪魔には、「鍵」などいない。悪魔の持て余す「力」を預かり、悪魔を縛る天国から解放できる相手は、この時空においてはまだいないのだ。他の多様な世界線ならいざ知らず。

何故そうした、「鍵」という可能性の存在自体を、彼が知っているのだろうか。悪魔も驚いたであろうし、そして彼自身も、誰がそれを教えてくれたのかはわからなかった。

お前ねえ.....と。彼のあまりの唐突ぶりに、いつにない怪訝さで両腕を組み、悪魔は大きな溜め息をついた。

「誰に聞いたのかは、知らないけどね.....『鍵』っていうのは、大事な『力』を預けるくらいだから、大事な相手しかねないもので。いてくれたら確かにオレはかなり楽になるけど、そう簡単に見つかるものじゃないことは、わかる？」

悪魔が警戒するのは、当然の話だった。「天国」の番人をするほどの「力」を持つ使徒は、その「力」を過去に何度も狙われている。

彼の妹が、攫われた先で悪魔使いとなったために、妹にも悪魔は利用された経緯がある。悪意のなかった妹からすら、そうして被害を受けるのだから、この翼の悪魔はほとんど誰にも、本当に心を開いたことがないのだ。

彼にとって、そんな悪魔の反応は、全くの想定内のものだった。なので、それくらいで話を終わらせる気は毛頭なかった。

そうでなくて、誰がこんな天上までやって来るだろうか。最早当初の目的など忘れ去って、彼は意固地に、悪魔を口説き落とすことを決めていた。

「アンタの翼を奪った責任で、俺はアンタに生かされたんだから。俺を生かし続けるなら、アンタもその責任を取れよ」

「.....——」

何の権利で、彼に生きろと言うのか。

翼なんていない、返すと逐一ごねた紫雨に、悪魔は曖昧に笑ってはぐらかすばかりだった。

「鵜も猫羽もいつか死ぬのに、俺だけ生き続けるなんて嫌だ。その時ちゃんと、アンタは俺を殺してくれるのか？」

この時のことは、後から考えれば、詐欺だとしか言いようがない。

そもそもからして、悪魔の翼を奪った彼が悪い。悪魔も確かに、甘さ故に翼を取り返さずに、あまつさえそれで彼を生かす道をとったが、奪われた翼を必ず取り返す義務——彼を殺すべき筋合いなどない。

それでも悪魔は黙り込んでしまった。あまりにお人好しの悪魔は、鵜や妹をいずれ失う彼の悲哀を、見て見ぬふりはできなかったのかもしれない。

長い時を生きる悪魔自身、いつかはそうして、現在の仲間達と別れる日が必ず訪れる。この「天国」に引きこもり続ける限り、現実味はなかつただろうが、彼と悪魔は同じ穴のムジナでもあるのだ。

うーん.....と。あぐらをかいたまま、両手を足の間の地に着け、お座りをする犬のような手付きで、不服そうに悪魔が彼を見返していた。

「.....えっと、ですね。オレには多分、大切なヒトというのを作るのが、第一に難儀で.....そもそも、一応オトコなので、オトコを相手にはしたくないわけでして.....」

どうやら悪魔が、一番ためらっているのは、そんなどうでもいい事柄らしい。あくどいわりにはすれていないと、彼の力みが一気に緩んだ。
「.....そういうことじゃないし。『大事なヒト』って、別にそういう関係だけじゃないだろ？」

これまで出会った多くの仲間、全てが等価に大切な悪魔には、確かに難題ではあるのだろう。

どうすれば誰かを「特別」にできるのか、その答は、一朝一夕に見出せるものではない。でもそんな事情は、生来強引な彼には知ったことではなかった。

ぶつぶつと悪魔は、本気で悩ましいように、下を向いて考え始めた。
「オレと同じ吸血鬼にするとか、お前を大事だと想う別人格を無理やり造るとか、やりようは色々ありそうだけど.....鶯ちゃんに怒られないかな、それ.....」
「.....」

うだうだと悩んでいる内容が、悪魔にしては良心的なので、つくづくヒト殺しの彼の毒気が抜ける。

なので彼は至って気楽に、両腕を枕に、ごろんとその場で寝転んでいた。
「.....とりあえずは.....アンタの答が出るまでは、俺、ここにいるつもりだから」
「——え？ って、猫羽ちゃんはどうするのさ？」

そろそろ引き上げようと思っていた。というのは言わずに、彼は最も彼らしい結論を、淡々とそこで自覚する。

燕雨はいつも、腕に巻く黒いバンダナをほどくと、横着な体勢のまま、悪魔の方に投げよこした。

「アンタにやるよ。大事な形見なんだ」

誰かが誰かの特別になる。その最も簡単な形は、何か大切なものを共有すること——

現実的には、同じ場所で同じ時間を、同じ目的を持って過ごすこと。彼には大昔に、そういう無二の相方がいたから、本能的にその自然な^{こたえ}方法を知っていた。

唯一の古い相方のバンダナを、わわっと慌ててキャッチした悪魔は、無意識に受け取ってしまった時点でもう負けている。

たとえ目に見える水面から姿が消えても、水底で花咲く時を待つ雨久花のように、その心は消えてはいない証なのだ。

こうして彼は、人間界の方では行方不明扱いとなってしまう。「鍵」を得て身軽になった翼の悪魔と共に、派手な悪魔狩りを始めるのは後々の話だ。

雲隠れした彼のせいで、橘診療所から援助が出ることになり、一人で高校に通い続ける水葵には、再会した時にさぞ怒られるだろう。

自力で獲得したわけではなさそうな、悪銭とも言える恵まれた生活。これで本当に良かったのか、おそらく今後も自問は尽きない。

それでも彼は、できることを続けていく。もしも「神」の怒りに触れるならば、その時にこそ、この咎人の終わりを願って。

Cx: 雨久花

with -Imanu'el- Lost hexagram. 了

rewrite:2020.3.8

謝辞



関連作：

[雨燕と時知雨 ※本作の前日譚]

(<https://puboo.jp/book/112782>)

[雨降花 ※本作の発端・Imanu'el 世界]

(<https://puboo.jp/book/131923>)

何かあれば：Twitter@kazari_sou：滓 (sai)

Last But NotLeast. —迷探偵猫羽のよろず事件簿—

それは確か、わたしが初めて、バイトをするための面接というものを受けた時のことでした。

「猫羽ちゃん。この世界は平和でしょう？」

「え？ うん」

事務所の二階のガレキに座って、にこにこ、三つのサイコロを手から手へと弄んでいる所長。うん、すごく殺風景だなんて、わたしは思っていました。

お話の意味がよくわからなくて、黙って待ってたら、それが正解というように所長は機嫌よく話し始めました。

「ここは私の魔法で、普通の人にはきれいなオフィスに見えています。でも、私は魔法より、本当は占いの方が好きなんです」

「？」

「魔法とはまやかしです。この事務所のように、既にある現実を取り繕うだけのものです。けれど占いは違う。私には、魔法で本物のビルを建てることはできなくても、この土地で仕事をしていれば、いずれ本物のビルを買うお金を手に入れることができる。占いはそれを教えてくれます」

それって……所長のように、ほんとに確信してる人には、それでいいと思うんだけど。わたしみたいに全然わからないと、魔法と占いの違いは難しいな。

「わからないでしょうね。でも貴女には、目に見えない世界が大事であることは、わかるでしょう？」

目に見えない世界。何だろう、わたしが直観で感じ取る気配とか、そういうことのお話かな？

それまで数回しか会ったことのない所長は、この頃はまだ、あんまり邪悪な言葉を使わなくて、口調もとても優しくかったから、わたしは一応緊張せずに考えることができました。だから色々、内容も覚えてます。

「わかりやすく話してあげましょう。たとえば私が、明日世界が滅びると、災いの芽を占いで知ったとします。私ならその災いが起きるのを止められる時に、私は世界を救うべきでしょうか？」

「それは..... そうだと思う」

「では、それで救われた世界は、私に感謝するのでしょうか？」

「それは..... ううん..... しないと思う」

その場合、誰も、所長が世界を救ったってわからないよね。だって災いは、所長に止められて起きなかったんだから。

「そうですね。平和っていいですよ。平和とはそういう、目に見えないものにも、支えられているんですよ。それこそ時には、いなくなった方が良いものの退場によっても」

「..... ——」

「災いはまず、起こさないこと。その芽をつむこと、それでも起きてしまった場合には、災いを引きずらないこと——思い出さないこと。私は占いで災いを察知し、魔法で災いを封じます。この事務所の目的は、大きく言えば、そうした願いの元にあるんですよ」

この時の所長は、いつものように天使の笑顔で、それが本気なのかどうかはわかりませんでした。

嘘はついてないんだけど、ほんとでもないなって感じ。何しろ後々には、「この世界にはもっと暗黒が必要」とか言い出す所長だしね。

それにわたしは、他にもちょっとだけ違和感があって、思わず言い返しちゃいました。「そうかなあ。もしかしたら、災いって思ったことが、災いじゃないこともあるかもしれないのに？」

「.....」

「わたしは自分で、ちゃんと観てから考えたいな。いなくなったものも、忘れたくないし..... 知ってたいし、できれば気付きたいよ。探偵になったら、そういうことって、できるようになるかな？」

しばらく沈黙が続きました。所長は無表情になって、ガレキにちょこんと座るわたしを、じっと碧い目で見つめてきて.....。

そうして、その後、「合格です」と言ってきました。

え、世間話だと思ってたら、これが面接試験だったんだ。ひやっとしました、あの時にはすごく。

そうやって気配を上手く掴ませてくれない所長の下で、それからわたしの苦労は、えんえんと続くことになるんだけど。

休憩の間に、そんなことをぼけっと思い出してたら、外から帰ってきた水葵^{なぎ}が冷たいペットボトルを渡してくれました。

「猫羽、お茶です。飲んだら再開しましょう、あともう一息です」

「ありがと。他はもう、残った物を捨てて、お部屋を掃除したらいいだけだよな？」

ここは水葵と、燕雨兄さんが住んでたお部屋です。とても暑くて、何もないキッチンとトイレ、シャワーしかないところです。

水葵はずっと、兄さんと住んでるとは言わなかったのに、どうして今日はわたしがここにいるかという.....。

「いいえ、最後は、私の荷物を猫羽の部屋に運びます。衣料はわずかですが、布団が重いのでばかにできません」

「そっか、そうだね。これからは、なぎとソウクと一緒に住むんだもんね」

ちょっと前に、どうしてか突然、燕雨兄さんが失踪しちゃったみたいです。兄さん、優しいのはいいんだけど、持久力がなくて無責任なところはあるからなあ。時々思い付きで、ふらっといなくなっちゃうんだ。所長に占ってもらったら、心配いらないって言われたから、一応静観してるんだけど。

その点水葵は、それでも兄さんの頼みを守ってわたしのそばにいるし、こうやって片付けまで一緒にしてくれて、怒りっぽいけど偉いよね。兄さんに怒ってるだけで、わたしには何も言わないしね。

長い時間を生きてる、悪魔な水の竜の水葵。本当は「薙ぎ倒す」のなぎだとか、渦って名前もついてるみたいで、淡々と言ってるけど、内心は面白くなさそうです。

そこまでしても、主の命は守りたい、誰かに仕えたいっていう水葵は面白いな。悪魔なのに、色々言ってくるのに、受け身で義理堅いんだよね。

ひょっとして、甘え下手とも言うのかな？ わたしも長く生きてるけど、わたしとは正反対かもしれないね。

低級悪魔使いのわたしには勿体ないくらい高位の悪魔さんだから、わたしは遠慮してたんだけど。もうちょっとくらい、頼ってみてもいいのかな？

掃除をしてから、最後に何も残ってないかあちこちの扉を開けて確かめると、キッチンの下に思わぬものが入ってました。

「え？ これ、ドライフラワー？ なぎ」

「――.....」

あれ、何でだろう。水葵、けっこう、驚いてるみたい。

確かに、兄さんも水葵も、お花っていうガラじゃないよね。

もう色褪せちゃってるけど、沢山の花がついた一枝のドライフラワー。いいな、こういうのもキレイだなんて、わたしは珍しくときめいちゃいました。

なのに水葵は、わたしからお花を奪っていこうとします。
「捨てましょう。荷物になります。そんなものは最初からなかったんです」
「ええ……それは何か、わたしはいやだな……ねえ、これ、もらってもいい？」
「……………」
わたしが少し、ふくれた顔をしたのが、水葵には意外だったみたい。こういう時のわたしは、ちょっと頑固です。このお花は絶対、お部屋に持って帰りたい。
思ってもみないところから、不思議な出会いがあるって、わたしは大事にしたいんだ。それがもしも、災いの種だったら、起きてから考えればいいことだしね。

水葵はしぶしぶ、頷いてくれたけど、布団を持ってアパートに鍵をかけながら、捨て台詞のように言い放ちました。
「そんなんですから、猫羽はいつまでも、バイトをやめられないんです」
ううっ……水葵、痛いところをつくなあ……。
全然関係なさそうなのに、反論できないの、何でだろう……多分、わたしが無防備だって、怒ってるような気がするからかなあ……。

実はわたし、七月いっぱい、バイトは辞めようと思ってました。ソウクが教えに来てくれるようになってから、家事がしっかりできるようになるのも、時間がかかりそうって思ったから。
でも、やむなく続けることになっちゃったんです。それはもう、世にも不思議な物語で。
「二週間も無断欠勤すれば当たり前です。違約金を取られずに済んだだけ幸運です」
「えええ……バイトって、そういうものじゃない気がするんだけど……」

所長との契約は、三カ月更新制で、無断でお休みはしない決まりでした。わたしが約束を破ったので、バイトを続けることで何とか許してもらいました。
何でかわたし、六月末から、勝手にバイトを休んでみたい。おかしいなあ……学校にはちゃんとしてたのに、その間に何をしてたのか、よく覚えてないや。
それでバイトは、泣く泣く更新です。嫌いじゃないからいいんだけど、わけのわからないことにはもうちょっと、注意しないとだね。

見えてるものだけが大事なんじゃない。何でなのか、面接の時の所長の言葉が、今頃になって耳に響きます。
うん……ファンタジーにもきっと、ミステリーはいっぱいあるよね。まだまだわたしは、沢山探偵の勉強をしていかなきゃ。

高校はこれから夏休みです。わたしはテストの点が壊滅的だから、補修にも行かなきゃいけなくて。それでも今までよりは、お休みが沢山あります。

お盆くらいは帰省していいって言うから、帰って色んなヒトに会いに行かなきゃ。

あーあ……バイトが辞めれなくて、平和な夏休みは夢のまた夢だろうな。水葵との新しい生活も始まるし、気をひきしめなくっちゃ。

「文句なら燕雨に言ってくださいね。私は言うことをきくしかありませんから」

まるでわたしの心を読んだみたいに、不機嫌な顔で水葵が言うから、わたしは思わず笑いかけてしまいました。

水葵の荷物を持つのは逆の手で、色褪せたドライフラワーを握りしめながら。

To be continued “迷探偵の乙女事件簿”.

Coming later in Puboo?

雨久花

著 pierrette**

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
